

五五五

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。

栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

栗野・徒然日記

式帖の式・春

それでは一筆!!

2022.3.2 自然の摂理



▲鳥羽川堤の桜も霞んでいました(6時30分撮影)

2022.3.3 愛を込めて



◀母が所有していた両手の平に収まるミニ雛人形。

季節は、「霞始隼(かすみはじめてたなびく)」候から、「草木萌動(そうもくめばえいずる)」候となりました。昨日昼過ぎからの細かい雨が上がった朝、深い霧が町を覆っています(トップの写真は6時31分撮影)。冷たい雨だったのに、暦どおり庭の木々の芽が膨らみ始め、梅やサンシイ、福寿草の花芽がもうまもなく開こうとしています。自然界は春に向かって動き始めていますが、ウクライナ情勢は五里霧中。今日は、2月28日に引き続き、ロシアとの2回目の会談が予定されています。

今日は雛祭り。写真は大正生まれの母が、生前大切にしていた雛人形。今の人形とは、少し違う顔立ちも心に沁みるものがあります。

一昨年、仕事でご縁のあった後藤由香子さんを訪ねました。後藤さんは節句人形工芸師として、斬新かつ気品のある雛人形を世に送り出していた方です。伝統工芸の世界での新たな挑戦には、ご苦労があったものと思われます。店先で「おみえになりますか?」とお尋ねすると、「居りません」・・・「えっ?」・・・「亡くなりました」。言葉を失いました。2017年9月、突然49歳で生涯を閉じられたのです。活躍の幅がますます広がっていた矢先のことでした。彼女の生み出した人形は、今も製作され、広く愛されています。

1982年、友好姉妹都市の締結を記念して、イタリア・フィレンツェ市から贈られたライオン像「マルロッコ像」が旧庁舎から新市庁舎に移設され、昨日、除幕式が行われました。そのフィレンツェ市との提携30周年となった2008年、岐阜市から贈られたのが、彼女のデザインによる親王飾り「織部」です。派遣団とともに

海を渡った雛人形の見送りに、中部国際空港まで電車でご一緒させていただいた記憶が鮮明に浮かびます。ルネッサンス芸術の地に、「伝統は今を生きている」・・・彼女の思いが海の向こうで息づいています。

ロシアの代表的な土産品である木彫り人形のマトリョーシカは、日本から持ち込まれた福祿寿の入れ子人形にヒントを得て作られたのが、始まりと言います。1つの人形から多くの人形が出てくるのが、子沢山の大家族をイメージさせるのが愛される理由と言います。激しさを増すウクライナ侵攻、世界を敵に回しているにもかかわらず、それを止める手立ては、ロシア国民に委ねられるしかないのでしょうか…。

2022.3.4 まちづくり協議会パネル展から



2月21日から3月1日まで、ぎふメディアコスモスで開催された「まちづくり協議会パネル展」。市内43地区の協議会が手づくりのパネルを出展しました。岩野田北まちづくり協議会も参加したことは、2月11日と23日の投稿記事に掲載のとおり。

「まちづくり協議会」は、自治会が直面していた加入率の減少などを背景に、地域の自治機能を維持、強化、発展させようと、平成16年度に始まりました。初年度は、モデル地区として3地区が選定され、その一つが、岩野田北まちづくり協議会です。以来、各地区に設置が進んできました。

自分が住む身近な地域をよく知り、環境向上の受益者でもある住民が、柔軟かつ迅速に地域を良くするため、住民、自治会、各種団体等が連携して効率的・効果的に進めるため、地域の实情に即した仕組みと体制を自分たちで考え、築くことが、住民自治によるまちづくりの大きな意義であり、役割と言えるでしょう。

合併前の村の歴史が息づき、また、各地区が抱える課題や地域の特色は、地区によって異なります。従って、活動内容や活動体制は、地区ごとに異なります。今回のパネル展でも、それぞれ特徴ある取り組みを知ることができました。

例えば、芥見地区では「高齢者等の住居の草刈りや分別回収のお手伝い」、芥見東地区では「歌声喫茶や里山整備」、木田地区では「クリーンレンジャー結成やふるさと講座開催」、常磐地区では「川と親しむ活動や歴史研究会の設置」、加納西地区では「アルミ缶回収」、本郷地区では「使い捨てカイロの回収」などなど。また、岩野田北の夏まつりで小学生の灯籠づくりを行っています。鷺山地区「竹灯籠グランプリ」、厚見地区「狂俳作品の行灯展示」が行われていました。お隣の岩野田地区では、ホームページを交流の場と位置付け、「川柳や作文、写真の投稿」を募集しています。

昨年策定した、地域ビジョンのもと、各地区の取り組みも参考にしながら、みんなの参加でまちづくりの輪を広げていきたいですね。

▲早田地区では、楽しそうな「よきいソーラ
ンのチーム」を結成。



▲日野地区は、女性防火クラブの活動を紹介。
空き缶コンロの講習会が目を引きました。



▲デザインに凝った西郷地区のパネル。花火大会を
開催されたのですね。



2022.3.7 辛抱



寒い!! 思わず叫んでしまいます。

ようやく開花した梅の花びらに、うっすらと雪が積もっています。季節は、蟄虫啓戸(すごもりむしとをひらく)。土の中の虫も、ごそごとと這い出してくるころ、陽だまりに小さな虫がいてもおかしくないのに、午後になっても止まぬ冷たい風のせい、全く見かけません。とは言え、この週末には20度越えとの予報に、つい心が躍ります。

一方、緊迫するウクライナ情勢。国連で見え透いた嘘をつく人、フェイクニュースの大量流布…。報道、SNS、噂の類など、真偽の見極めが問われます。私たち日本人は、とにかく報道は正しいものと頭から信じ切ってしまいます。平成10年頃、情報リテラシー(情報を適切に判断し決定を下す能力)教育の必要性を説く動きがありました。情報操作まがいの動きとそれになびく世論の流れ…。さて、その実態は?

明けぬ夜はない、春は必ず訪れる…。信じつつ、他人事と思わず協力し合い、直面するであろうエネルギー不足や物価高騰に対しても、心の準備が問われています。



▲ようやく膨らんできた福寿草の蕾にも淡雪が。

▶地面のヨモギの芽は、このところ毎朝、霜で白く輝いています。



2022.3.8 ミツバチの日



▲ぎふメディアコスモスで昨年 11 月に開催された講演会「ミツバチ社会と SDGs の親和性」(SDGs:2030 年までの国際社会における「持続開発目標」)。

今日 3 月 8 日は、語呂合わせで「みつばちの日」。岩崎から散歩で近くまで来た知人から誘いの電話で、小学校近くの喫茶・桑原ハニーガーデン「カメラリア」で待ち合わせ午後のコーヒーと洒落込みました。栗野東で昭和 35 年から養蜂を営んでおられる方のお店です(待ち合わせ場所を選んだのは、みつばちの日だからではなく、全くの偶然)。店内は、春の雰囲気、硝子越しに陽差しが燦々と注ぎ、シクラメンが機嫌よく育っています。窓の外の植込みの椿(カメラリア)の花に、大きなヒヨドリが蜜を吸いにやってきました(話に夢中で、写真を撮り忘れてしまいました)。

昨年 11 月 26 日、食生活の大切さを広める活動を行っている燦々の会の講演会を聴きに行きました。講師の中村源次郎さん(市内に本社のある秋田屋会長、九代目当主)が、学生時代の仲であったこともあり、聴講したのですが、ミツバチの生態や農業の生産に寄与する家畜としての重要性など、大変興味深い内容でした。

在来の二ホンミツバチは、天敵のミツバチを集団で囲み、蒸し殺してしまうと言います。一方、養蜂で主に使われるセイヨウミツバチは、スズメバチの生息域外であるため、なすすべもなく白旗状態と思われていましたが、数年前に、針で刺すことで対抗することが分かったようです。が、いずれも大挙しておそわれた場合は、人が救いの手を差し伸べなくては、全滅の悲哀を味わうこととなります。これが人間の争いの場合、誰がとりなしてくれるのでしょうか。

ところで、岐阜は近代養蜂発祥の地とも言われ、明治 43 年には、岐阜市で第 1 回全国養蜂家大会が開かれています。近くの畜産センターの一角にある「みつばちの家」(トップの写真)では、その生態などが展示紹介され、本物のミツバチも見ることができます。



▶風はまだ冷たいけれど、庭のフクジュソウがようやく開花しました。

2022.3.10 サボテンの日



◀春日井市のサボテンのキャラクター！

今日3月10日は、語呂合わせでサボテンの日。2021.2.8の日記で紹介したお隣の瑞穂市にある世界一の栽培面積を有すると言われるサボテン業者・岐孝園が提唱し、日本記念日協会の認定した記念日だそうです。ちなみに昨日3月9日は、サキュレント(多肉植物)デー。多肉植物は、アロエ(医者いらず)など葉や茎、根に水分を蓄え肥大化した植物のことですが、普段、多肉植物と分けて扱われるサボテンも、水分を蓄えた茎が柱状や球形などの特徴を有する多肉植物の一種。地球上には、7,000種類以上の多肉植物(内サボテンは2,000種類以上)があると言います。トップの写真は、サボテン科の *Gymnocalycium buenekeri* (和名:聖王丸)です。今年は寒かったため、まだ生育し始めていません。

子どもの頃、サボテンはシャボテンとも言っていました。ウチワサボテンの樹液を石鹼として使ったからとの説があります。種類が多いだけに様々な特性を有するサボテン、その生産量の多い春日井市では、特産品・ブランドと位置付け、キャラクターや食用サボテンを使ったサボテン関連商品の開発など、市のまちづくりに活用しています。まちづくりの芽も、多彩ですね。

2022.3.11 花は咲く



東日本大震災の1年後、訪れた釜石市。市役所の目の前まで津波が押し寄せ、市内の至る処に災害の爪痕が生々しく残されていました。災害(天災)の脅威をあらためて思い知る一方、福島原発事故は人災事故として、今もなお裁判が続いています。

震災から11年。チェルノブイリのあるウクライナでは、原発を標的にした攻撃が行われています。人災どころか、犯罪に犯罪を重ねる暴挙と言わざるを得ません。

ぎふメディアコスモスにウクライナ支援の募金箱が設置されました。他に支援の方法が見つからない歯がゆさを感じながら、一刻も早い停戦を願いつつ投じました。

ようやく春の訪れを感じる日差しの中、1本ずつ植えられたヒカンザクラ(緋寒桜)とジュウガツザクラ(十月桜)が、一足早く満開に。



◀市内3カ所(他に市役所、市社会福祉協議会)に設置されたウクライナへの募金箱。

◀ジュウガツザクラはすでに散った枝も。

日付が変わる頃に降り始めた雨。冬のコリを解くような激しい降りでしたが、明け方には上がり町はモヤで覆われました。

昨日は午後から温度が上がり、モンキチョウが初お目見え。今日は、植木を冬の間、囲っていたビニールの中に姿が見られました。そっと摘み上げてセイヨウリュウキンカの花においてあげると、一度は飛び立ちましたが、すぐ戻って来て、一心不乱に蜜を吸い続けています。お腹が空いていたみたいです。一昨日までの寒さが嘘のよう、雨の後に一斉に芽、花がほころび始めました。畔にはスマレの種類も一斉に花開いています。

2022.3.14 春が来た



2022.3.17 路傍の世界



わずか数メートルほどの道端の草むらに、ツクシとキュウリグサ(トップの写真)、ナズナやタンポポ、スマレをはじめ、さまざまな花が共生しています。栗野の各所で、植生の変化が楽しめます。1年を通して観察すると地味な花にも味わいが合っていますよ。こんな狭い世界でも、仲良く育つ知恵が備わっているのです。見習いたいものですね。

2022.3.20 球春



◀入場者数は5千679人。
久しぶりに5千人を超えました。

FC岐阜のホーム開幕戦が、昨日、長良川競技場で行われました。開幕の初戦は引き分けに終わった後を受けてのゲームでしたが、3対0で快勝。今季は、元前日本代表やJ1からの大幅な補強を実施、ファンの期待は高まるばかり。早速、移籍組が得点するなど、期待通りの活躍。ラモスを監督に迎えた当時を上回る盛り上がりを感じます。いわゆるクラブハウスを市内に建設するに当たっては、私も少しお手伝いさせていただき経験がありますが、県内42市町村が協力し合うなど、県をあげて支援するチームとして現在に至っています。今季から、チームの運営体制も変わり、民間の力がウェイトを占めるようになった気がします。紆余曲折の道を歩んできたチームですが、J2いえJ1目指して頑張りたいですね。

高校野球の春の全国大会も始まりました。北京五輪では平和の祭典というお題目すら踏みにじられた感がありますが、スポーツの持つ意義を考えつつ、心から楽しみ、生活のエネルギーにしていきたいと思います。

2022.3.21 路傍の世界 その2



寒の戻りにも負けず、道端の草花も、にぎやかさを増しています。ヒメオドリコソウ(トップ写真)、ホトケノザ、トキワハゼ、そして見分けが難しいタネツケバナの仲間などなど、路傍の世界は多様性が一気に満開。早春の花々が、地面すれすれに咲き誇っています。背が高くなり草むらとなる季節の草花は、陽当たりを求めて競争が激化し、仲良くとはいかないかも知れませんね。



▲土起こしの田に一株のタネツケバナの仲間。



▲春の七草のホトケノザ(コオニタビラコ)とは異なる種類のホトケノザ。花の下の葉が仏様の台座に見立てています。



▲地面に這いつくばって咲くトキワハゼ。



▲水路際に咲く大型のタネツケバナの仲間。

2022.3.22 花ごよみ・馬酔木(アセビ)



栗野台の団地にも、春の訪れを告げる木々が咲き始めました。

ヤブツバキはもう花を落とし始めています。匂いつの間にかアセビが満開に。漢字で馬酔木と書きますが、この花の匂いは、ちょっと苦手です。ジャスミンに似た強い香りです。

そもそも柔軟剤や部屋のおい消し、整髪料の匂いも困りもの。無香料の製品って、探すのが本当に大変、と言うか無香料の柔軟剤は店舗で見かけたことがありません。過敏症ではないけれど、程度問題ですね。

自然界でも、アセビの香りは、数少ない苦手な植物の香りです。



▲ヤブツバキはもう花じまい

▶うつむき加減の侘助ツバキ



2022.3.25 水温む

昼間の陽気に誘われて、お隣の山県市の公園「四国山香りの森公園」にやってきました。ケキョケキョと鳴いていた鶯。まだまだ下手だねえ、と思っていたら、ホーホケキョ、としっかり初鳴き。二度と聞こえてこなくなったので、意地の一声と言ったところでしょうか。

小川には、ネコノメソウ、山際にはショウジョウバカマが見られました。駐車場には、メディアコスモスで見かけたヒカンザクラが満開に。子ども連れは遊具で、高齢者は喫茶店で、例年より遅い春を待ちかねたかのように人出が見られました。近くの畜産センターの山や薬草園の野草にも、春が訪れているでしょうね。

カメラを抱えた男性に「ギフチョウはいませんか?」と尋ねられました。昨年3月8日の日記に書いたカタクリの群生地を紹介しました。寒の戻りはあったけれど、そろそろ、咲き始めているかな。



▲陽光眩しく…水温む季節。



▶シヨウジョウバカマ
も見頃に…

◀ネコノメソウが咲き
始めました。



2022.3.26 刺す虫



ヨコヅナサシガメ…サクラやケヤキなどの樹上で生活しているらしいが、確かに桜の幹に何匹も群れています。刺す虫と言えば、ハチ、蚊、ブヨが思い浮かびますが、毛虫などを捕食するカメムシ(サシガメ)も食いつきます。今年初めて見た甲虫が体長2cmほどのサシガメ。気付かずに幹に手を触れると刺されます。痛みが走り、血が出ることも。

ブヨと言えば、以前、郡上の母袋のキャンプ場でふくらはぎを大量のブヨに刺された時は、1カ月間、湧き上がるようなかゆみに悩まされました。ダニや最近海外から侵入してきた蜘蛛や蟻の類には、命にかかわる種類も。アウトドアシーズンを控え、十分注意したいものです。

2022.4.1 つい長い文章に・・・



満開の白花のプリムラの株に、ピンクの株が混じっていました。

今日から岐阜市でも、遂にプラスチック製容器包装の分別収集が始まります。この地域の収集日は水曜日ですが、今日が収集日の普通ごみの中から、慌ててプラごみを分けて取り除きました。

令和元年の普通ごみは、重量比で紙類 36.7%、繊維類 7.1%、生ごみ類 25.1%、プラスチック類 18.7%、ゴム・皮革類 0.8%、木・竹・藁類 10.4%、金属類 0.4%、ガラス類 0.2%、陶磁器・その他類 0.7%との[市の調査結果](#)が出ています。これに対して、手元にあるビン・カン分別収集がスタートする以前、昭和 55 年の調査結果は、紙類 19.9% (21.8%)、繊維類 3.4% (3.7%)、生ごみ類 49.3% (53.9%)、木・竹・藁類 7.8% (8.5%)、プラスチック類 8.8% (9.6%)、ゴム・皮革類 0.7% (0.8%)、金属類 4.0% (0%)、ガラス類 4.5% (0%)、陶磁器・その他類 1.6% (1.7%) です。

()内は金属とガラス類を除いた場合の比率ですが、比較すると、最近の組成は、紙類が減少する一方、軽いはずのプラスチック類の増大が顕著であることが分かります(余談ですが、更にさかのぼれば、貝類が項目に入っていた資料を見たことがあります)。ビン・カンは、普通ごみに交じっていたなら、収集してもらえません。しかし、プラスチック類はそこまで厳密にはならないでしょうね。と言うのも、ごみは、衛生的に処理処分することが基本だから。例えば、マスクを捨てる時は、密封してからごみ袋に投じる訳ですし、汚れたものを合成樹脂だからと言って、またいくら洗浄したからと言って、リサイクル施設に無責任に送り込むのは避けなくてはならないでしょう。

ごみ処理は、自治体がそれぞれの実情に即した処理方法をとることが可能です。従って、自治体の区域内で処理処分できない、いわばごみ戦争状態に陥ったり、ごみを全量焼却できる処理能力がなければ、住民に何種類にも分けて出してもらわざるを得ません。新開発の資源化設備に投資・導入して、失敗の憂き目を見た自治体もあります。ごみ処理は、自治体の能力が試される施策の一つと言えるでしょう。地球温暖化への影響を別にすれば、ごみは焼却し、その余熱を利用して発電することが、衛生面や効率を考えれば現行では有効な資源化方法です。とりわけコロナ終息が見通せない中、新たに稼働する資源化施設をはじめ、ごみに起因する健康被害が生じてはなりません。

昔の大八車で人力収集していた頃と違い、収集に要するエネルギー資源は単純に言えば5割増。プラスチックごみを分別収集したからと言って、海洋汚染問題が解決するわけでもありません。

しかし、物質的な資源化は今日、避けて通れないテーマ。今日から、企業にプラスチックの使用削減を促す「プラスチック資源循環促進法」も施行されます。一方で食品トレーは、今後は市の収集に出せるようになります。業者のルートが行政への負担となります。

資源の有効利用とごみの減量は、社会全体のテーマです。地域の実態に応じたごみ処理ですが、資源化に関しては、自治体だけで決定できるものばかりではありません。

2022.4.2 花ごよみ・早春の白い花々



風が冷たく感じられます。ウィンドブレーカーを羽織って、近くの畜産センター周辺に散歩に出かけました。

ようやく満開の桜に混じり、コブシの高木も花を付けています。この季節、白い花が多い気がします。セントウソウ(トップのマイクロ撮影写真)は、興味がなければ見過ごす小さな花ですが、コブシとともに早春の雰囲気を味わあるのでしようえます。よく似たセリバオウレンの群生地があるはずですが、薬草園の山は立ち入り禁止の処置が講じられ、見ることはできません。

豚コレラへの警戒は今も継続中のようで、センターの家畜もいまだに戻ってきません。コロナ禍で人々の交流が減る中、せめて子どもたちと動物の触れ合いの場が、早く再会されると良いですね。ちなみに、中心市街地では3年ぶりの道三まつりが開催され、多くの人出があった模様。コロナ感染者は増加傾向にあり、第7波が懸念されています。



◀コブシも満開。

▶キイチゴの花が、もう咲いています。



▲平成30年の豚コレラ発生以来、動物はいまだに戻ってこない畜産センター。満開の桜も寂しそう。

2022.4.4 雨上がる



昨日一日、しとしと降っていた雨が上がりました。山々から雲が湧き、陽が昇るにつれ空に溶け込んでいきます。 雫の残るカエデの枝先に、小さな花が下がっています(トップの写真)。桜の花卉は重たげですが、濃い色に染まっています。

季節は、「雷乃発声(かみなりすなわちこえをはつす)」候。春雷はまだ鳴りませんが、降っては晴れ、晴れては降るの繰り返し…庭や路傍の草花は、にぎやかさを増しています。



▲たなびく雲は刻々と変化していきます。【6時56分】



▲眉山も姿を見せ始めます。【6時56分】

2022.4.4 山桜咲いて、蛙初めて鳴く

昼近くなり、気温はぐんぐん上昇し、20.3度まで上がりました(最低気温は8.9度)。山裾の山桜も咲き始めました。我が家の竹柵の筒の中に、数日前から二匹のアマガエルが、今年も姿を現しましたが、まだ鳴きません。と、隣家からアマガエルの初鳴きが聞こえてきました。春爛漫を通り越して、日陰が恋しいほどの日になりました。



▲例年、竹柵に這わせたツルニチニチソウの一番花が咲くころ、アマガエルが顔を出します。

竹筒の中のカエル...のぞき込むと、後ずさりして隠れます。



2022.4.5 花ごよみ・スマイレ



家々の花壇にパンジー(最近では「三色スマイレ」とは言わないですね)が、花開いています。野路のスマイレも真っ盛り。我が国にはおよそ50種類があると言います。スマイレの見分け方は難しいですね。茎に毛が生えているかどうかで種類が違ったり、個体差が合ったりと、名前の特定期まで根気が続きませんね。「スマイレ」の名前がついているスマイレを最近見かけないので、散歩中も気にかけていると、最後の最後(よくあることですね紫の濃い色がこんもりと見るからに美しい。切り花にしてガラス瓶にさしてみても、安らぎの小さな空間が生まれました。春の一時期に咲くスマイレの仲間たち、名前を調べるには時間がちょっと短いようです。



▲アスファルトからたくましく咲き誇っています。スミレと似ているノジスミレかなあ？

◀鳥羽川堤でやっと見つけた「スミレ」。鮮やかな堇色が寄り添って咲き誇っていました。



目

▲最も身近にみられるタチツボスミレ。



▲葉に特徴のあるエイザンスミレ。庭でも自分の居場所を探しては、毎年機嫌よく咲いてくれる。



◀エイザンスミレと同じように葉に切れ込みのある肥後スミレ。花弁がほんのり赤く染まる。自宅の庭で。

2022.4.13 大龍寺のドウダンツツジ



だるま観音で有名な大龍寺のドウダンツツジが満開になりました。秋の紅葉時期と同様、見物客でにぎわっています。どこからか鶯の鳴き声も聞こえ、ひとときの別世界を楽しめますよ。



▲山の斜面の満開になったドウダンツツジを借景に。拝観料は 300 円、お抹茶は 500 円。

2022.4.13 駆け足で行く春



夏日が続き、この時期としては記録的な暑さが続いています。つい先日まで寒の戻りで震えていたのに。フキノトウも立ち、花を開いています。山際のツバキの大輪も落花。「鴻雁北(こうがんかえる)」候。鳥羽川の鴨の数もめっきり少なくなりました。足早に春は遠のいていきます。

2022.4.14 これ何? 泡を食う?



▲栗野西7丁目バイパス高架下付近を流れる泡(7時30分)



▲栗野山県市の丸山橋から上流(8時40分)

昨日、ウグイの遡上はまだかな、と黒木橋の上から鳥羽川を覗き込んでいると、体長60cmはあろうかという鯉が上流に向かって泳いできました。あまりお目にかかることはないのですが、橋の上から写真を撮ったのですが、遠すぎてちょっと無理がありましたね(7時17分)。その時、気付いたのが、川面に浮かぶ大量の白い影が点々と浮かび流れています。时期的には桜並木の花弁(花筏)かとも思いましたが、どうも違うようです。確認するために河川敷に下りて見ると無数の泡でした。山県市の丸山橋の上流方面から流れ込んでいます。実は、これまでも時折見かけることがありましたが、気になったので、県の岐阜地域環境室にメールに写真を添えて情報提供しました。早速、今日の午後に返信がいただけました。水質検査の結果、特に異状はないとのこと。藻類の発生によっても泡が発生することがあるそうです。

話は変わりますが、地域課題の解決は地域のまちづくり協議会の役割でもあるのですが、ある種の特定課題について、検証し、迅速に対策を練り、対応する機能を有した、住民と行政の間に立つ第三者機関の中間支援組織があるとまちづくりが進めやすいですね。住民個人も発見した課題をリアルタイムに寄せることのできるハードルの低い組織が良いでしょう。長期的な取り組みが必要となる場合も、対応プロセスを可視化・蓄積・共有しやすいですね。客観的・専門的な助言も得ることができますし、地域のカバナンス強化、行政のスリム化にも一役買うのでは?

2022.4.16 珍しきもの



▲黄色くぶら下がっているのが雄しべ。

先日、山県市のスーパーで、鮫の肉が売られていました。このあたりの店では見かけたことがありませんでしたから、ちょっと新鮮な感覚でした。一般に流通している種類はネズミザメ(モウカザメ)らしく、揚げ物や焼き物にしてもおいしいらしい。値段も至ってリーズナブル。とは言え、今回は見合わせました。自分が料理することになるでしょうね。

畜産センターの道路を挟んだ山際の散歩道に、竹がかぶさるように倒れてきています。よく見ると、花ではありませんか。無数の花芽の重さに耐えきれず、しなっているようです。多分ハチクの種類ではないかと思われま。竹の花が咲くのは60年に一度とか、120年に一度とか言われています。ハチクは、1908年前後に全国で開花が見られたそうで、その後2000年代に入ってから再び開花が始まったそうで、ピークは2020年代という説もあります。花が咲くと竹林全体が枯れるため、昔から不吉と言われてきました。それはともかく、日頃から地震への備えは怠りなく…。



▲見るからに柔らかそうな白身で、値段はリーズナブルな鮫の肉。買ってみれば良かった。

2022.4.22 いただきもの



先日の日記で、竹の花の開花を書きました。その日の夕方、偶然ですね、筍を3本もいただきました。家の前を時折散歩されている方で、花をお分けしたお礼とおっしゃって…。竹が咲いていた常磐地区の方からですが、その山で採れたものかどうかは分かりません。花が咲くと筍は生えないと言いますし、いただいたものは孟宗竹と思われます。こんなに沢山、どうやって食べようか、と悩んだ割には、数日で完食。出来上がった品は煮物、メンマ、天ぷら、豚の冷しゃぶと新キャベツの茹でたものと一緒に酢味噌でいただく一品、中華風のチンジャオロースに餃子などなど。品数は多いのですが、材料費は全部合わせても1,000円もかからない。我が家のエンゲル係数が適正な範囲に収まる気がします。おすすめは、春巻きと先っちょの薄くはがれてくる部分をさっと湯がいたお刺身風が絶品。筍と一緒にいただいたワラビも入れた定番の炊き込みご飯やパスタを主食に、ただただ食べる人。和・洋・中に使え、飽きのこない味、繊維分もたっぷり。

雨模様の日が続きますが、季節は穀雨。来週は、雨続きとの予報。菜種梅雨になりそう。

雨上がりの道端で、スギナが朝陽に輝いていました(トップ写真)。

◀麦の穂が青々と伸びてきました。



◀▲筍料理はスピーディに出来上がり、メニューも豊富。

煮物、天ぷら、酢味噌和え、刺身風、メンマ、チンジャオロース、パスタ、春巻き、餃子…数日、春をにぎやかに堪能できます。

2022.4.5 花ごよみ・スマレ



家々の花壇にパンジー(昔のように「三色スマレ」とは言わないですね)が、花開いています。野路のスマレも真っ盛り。我が国にはおよそ50種類があると言います。スマレの見分け方は難しいですね。茎に毛が生えているかどうかで種類が違ったり、個体差が合ったりと、名前の特典まで根気が続きませんね。「スマレ」の名前がついているスマレを最近見かけないので、散歩中も気にかけていると、最後の最後(よくあることですね)紫の濃い色がこんもりと見るからに美しい。切り花にしてガラス瓶にさしてみても、安らぎの小さな空間が生まれました。春の一時期に咲くスマレの仲間たち、名前を調べるには時間がちょっと短いようです。



▲アスファルトからたくましく咲き誇っています。スマレと似ているノジスマレかなあ?き誇っていました。



▶身近に見られるタチツボスマレ。



▶葉に特徴のあるエイザンスマレ。狭い庭でも毎年機嫌よく咲いてくれる。



▲鳥羽川堤でやっと見つけたスマレ。鮮やかな堇色が寄り添って咲き誇っていました。



▶エイザンスマレと同じように葉に切れ込みのある肥後スマレ。花卉がほんのり赤く染まる。

2022.4.24 植物学の日



今日は「植物学の日」。「日本の植物学の父」と言われる牧野富太郎博士が、1862年4月24日（旧暦）に誕生したのにちなみ、「マキノの日」とも言われます。時期を迎えたシロヤマブキ(トップの写真)やイヌノフグリも、博士の命名によるものです。尊敬する博士の辞典を片手に、まだ見ぬ草花に夢を馳せた少年時代が懐かしい。

当時、尊敬する日本人には松下幸之助、野口英世が名を連ねていた記憶があります。戦時中は、西郷隆盛、吉田松陰、乃木希典、楠木正成、外国人粋ではヒトラーが上位を占めていたという情報も…。近年は、宮崎駿、坂本龍馬がランキングの上位を占めているようです。

▶昭和 37 年発行の偉人伝全集 21 は、牧野富太郎博士。本棚にずっと眠っていました。



2022.4.25 息吹



- ▲カンボクの花を訪れたハナムグリ
- ▶ウノハナにもハナムグリがやってきました。



雨が降るたびに山の緑が濃くなりますね。狭い庭でも、虫たちの動きも活発になってきました。咲き始めたカンボクの花に誘われて、花粉や蜜を好むハナムグリがやってきました。翅の付け根が逆三角形になっているので、コガネムシと見分けられます。コガネムシの幼虫がバラなどの根を食い荒らす害虫なのに対し、ハナムグリやカナブンは腐葉土を食べて分解するので益虫とされます。一方、木の下菊の新芽がうなだれるようにしおれています。案の定、体長1cmほどのキクスイカミキリが葉の上にはいました。新芽の30cmほど下に産卵する際、茎を傷つけるため、芽は枯れてしまいます。また脇芽が伸びて大事には至りませんが、花好きにとっては害虫と言わざるを得ません。

カンボクの木は庭木としては珍しいでしょうね。40年も前になるでしょうか、名鉄の岐阜駅の発着点に合った新岐阜百貨店1階の小さな園芸店で10cm程度のポット苗を買いました。シロモジやクロモジ(洞戸の山には自生しています)も買いましたが、今残っているのはこの1本(後にも先にも雑縛の苗木が売られていたのはこの1回限り)。今では3mほどになり、毎年咲いてくれます。

さて、今はなき新岐阜百貨店には、子どもの頃、屋上にジェットコースターがあり、ビルから飛び出すかのような乗り心地で怖かった思い出があります。2周回してくれるのですが、私たち以外の家族連れは1周で降車していました。平成元年度、現シティタワー43の岐阜駅西地区の再開発エリアに浮上していた三越百貨店の出店計画に対抗して、立派な建て替えの完成予想図が大々的に発表されました(時を経た後、現在の規模で建て替えられました)。

平成初期の岐阜市の地価は、名古屋からのアクセス時間に比して、べらぼうに高かったため、商業用途でないと採算が取れませんでした。アパレルも元気だったことから(銀行員が自転車で回って、次々と黒かばんを膨らまして走っていました)、1階の店舗面積だけでも十分な収益が上がっていたため、再開発は進みませんでした。その後は、バブル崩壊で、旧ジャスコ跡地に進みかけていた第2パルコ出店の話も立ち消え、民間の再開発はしばらく休眠期に入ります。以来数十年、シティタワー43などいくつかの再開発が完成し、近年は高島屋南地区は完成間近、問屋町地区のツインタワー再開発の動きがあります。地価もそれなりの価格となり、住居用途でも採算が合うようになったのでしょう。

ウクライナ事変などを背景に、物資高騰も懸念されますが、時期を逃すことなく、魅力的で安全なまちづくりが市民と行政の協働で進むと良いですね。



▲菊の新芽を枯らす小さなキクスイカミキリ。カミキリムシの仲間には、庭木を何本も枯らされた苦い経験があります。
▶キクスイカミキリにやられた菊の新芽。



▲カンボクの花が青空のもと眩しく輝いています。眉山も緑が濃くなりました。

2022.4.26 山菜の王様は？



山菜の王様はタラの芽、女王様はコシアブラと言われることが多いようです。農協の直営店で、そのタラの芽とコシアブラが売られていました。食したことのなかったので少し値が張ったけれど(1パック400円ほど)、コシアブラを買い求めました。その日のうちに夕餉のご馳走となりました。天ぷら、三種の和え物(胡麻、鰹節、酢味噌)…少し癖のある味でしたが、堪能しました。考えてみれば、タラの芽もコシアブラも希少価値があるのでしょうかね。春の味覚、山菜も出そろい、個人的にチャンピオンを決めるとしたら…結局のところ、味覚としてはタケノコ(どんな調理にも合う)、ツクシ(煮付けがおいしい)、フキノトウ(湯豆腐の薬味)が私の好み。あなたが選ばれるのは？

◀水でさっと洗い、水切り中のコシアブラ。これで1パック分ですが、味わうには十分な量でした。



◀畜産センター付近で見かけたコゴミ。山菜は天ぷらにできますが、個性を味わうには湯がいて食べるのがおすすめ。そんな中、コシアブラは天ぷらにしても香りが残っていました。

2022.4.30 花ごよみ・ナンジャモンジャの木



この木はなんじゃ?という名前の分からない珍しい木を指してナンジャモンジャの木と言いますよね。地域によって、樹種は違うらしいのですが、一般的にはヒトツバタゴを言います。畜産センターの大木も今が見頃です。市内には至る所に植樹されているようで、私が見かけただけでも、岐阜公園のロープウェー乗り場付近、護国神社、金神社などなど。岐阜駅北口にも、若木が植樹されています。ナンジャモンジャの木巡りなどいかがでしょうか?



▲岐阜公園のロープウェイ乗り場付近。

▶護国神社境内。

2022.5.2 雨後のタケノコ



雨上がりに粟野台の山際の竹林を覗いてみました。思ったとおり、孟宗竹のタケノコが、一気に伸びています。4月16日に、ハチクの花のことを綴りましたが、孟宗竹の花の開花の周期などは今一つ明らかでないようです。ハチクが前回開花したのは2008年のこととか。開花後は一斉に枯れるため、岐阜提灯の製造は大きな打里があったと言われます。ちなみに、生活必需品が竹細工に頼っていた我が国では、廃村になってしまっても、竹林があれば、以前に人里があったと言われます。エジソンが電球のフィラメントに京都の竹を使ったことは有名ですが、竹の価値を今一度見直したいですね。

2022.5.6 花ごよみ・ツブラジイ



金華山の名前の由来とも言われ、岐阜市の木に指定されているツブラジイの花が五月の陽光に輝いています。金華山は盛りを過ぎようとしています。粟野はまだこれから、1週間遅れといったところでしょうか。北へ1里余ほどの距離しか離れていないのに、気温は低目なのです。かぐや幼稚園西の眉山の山際、神明神社の後背地などにひと固まりになり咲き、町を囲む山々に点々と見られます。梅、桜そしてツブラジイと3度の花見を味わっています。季節は立夏を迎えました。



◀粟野東の路地からは、神明神社の山際のツツブラジイが朝陽に眩しく輝いて見えます。



▶鳥羽川堤から眉山のツツブラジイを望む。

2022.5.7 里山植物園



◀目立たない場所でエビネが見ごろを迎えていました。

▶アザミも咲き始めています。



周りの自然がいきいきと輝き始めるこの季節、話題はついつい植物のことが多くなります。

畜産センターに、いつの間にか里山植物園のコーナーがオープンしていました。植物園と言うほどの広さではありませんが、身近な草木が楽しめて、勉強になりました。植えられている植物からすると早春がらが見ごろの時期かと思います。芝生広場の山際の散歩道の管理棟に近い場所です。動物がいなくなって、連休中も閑散としていた畜産センターですが、今後も新たな魅力づくりに頑張ってもらいたいですね。

ちなみに、里山植物園のような試みは、地域の花壇づくりの参考になりそうです。

2022.5.11 チキンラーメン



インスタント食品の代名詞と言えばインスタントラーメンを思い浮かべる人が多いのでは…。今からさかのぼること60余年、昭和33年にチキンラーメンが発売されました。テレビの宣伝につられて母が買ってくれたのを、兄と並んで食べたことを覚えています。しかし、食べ馴染んでいた出前の志那そばとは全く別物の味に、二人とも一瞬言葉を失いました。3分が待ちきれずに蓋を開けたせいもあったのでしょうか、あまりおいしいとは思いませんでしたね(今では、時折無性に食べたくなる味なのですが)。

4月4日に発売され、テレビでも宣伝されていた、そのままかじる「0秒チキンラーメン」が4月27日、突如発売休止になりました。「当初の販売計画を大幅に上回り、十分な供給量を確保できない状況となったため、(中略)7月中をめどに販売を再開」予定だそうです(日清食品ホームページから)。

たまたま興味本位で購入してあった一袋があたので、実食!! 宣伝通り、塩分抑え目(通常約50%減とか)。ビールのお供や非常食には良いかも。でも、なぜ発売から半世紀以上を経た今なのでしょう??? これも時代の要請なのでしょう。くれぐれも、戦場で重宝されることのないように。

2022.5.15

絵本展



関市の本町にある古民家・あいせきで、「ほんまち絵本展」が、今日 15 日まで開催されています。一緒に企画を手掛けたことのあるイラストレーターの谷口土史子さんからご案内をいただいていた(トップ写真のはがき)ので、遠出してきました。いつも変わらぬ温かみのあるイラストに、ほっこりさせていただきました。また会場には、若くして亡くなられた畑中駒子さんの作品「異界転生ルキノ」も展示されていました。創作の原動力となるものは人それぞれ、あるいは時間軸や事象によっても異なるのでしょうけれど、どの作品にも作者の心が込められていることに感動させられます。

ところで、絵本づくりは、小さな子どもでも、自分が表現したいことを具現化する格好の手段ではないでしょうか。地域や家庭で、絵本づくりに挑戦してみてもいいのでは？ 画用紙とクレヨンさえあれば、すぐにでも始められます。まずは、一緒にコミュニケーションを。



▲イラストレーターの谷口さん(右)と偶然にも会場でお会いしたのが、昔、お父さんにもお世話になった印刷会社の2代目のお嬢さん。懐かしい人と会うのは、うれしいものですね。



▲絵本展の会場となった古民家は、地域コミュニティの拠点施設として整備されたそうで、広い世代でにぎわっていました。



昭和の時代になってしまいますが、谷口さんに作画をお願いしたに絵本タイプの啓発誌(昭和62年発行)。親子で消費生活を学んでもらおうとの企画でした。子どもと一緒に練った企画内容は、裸の王様がさまざまな消費生活課題を乗り越えて行く冒険物語。当時は、豊田商事事件が大きな社会問題化した頃でした。5月30日は「消費者の日」。人の心理に付け込んだ悪質な手口はますます巧妙になっています。裸にされないよう、年代を問わず要注意です。



◀岐阜市のボランティアの手引き「みんなのためにあなたのために」(平成16年発行)の挿絵の絵本「小さな木と大きな森の物語」(冊子形式ですが、物語のチラシが市民活動交流センターの[ホームページ](#)で閲覧できます)も、谷口さんとの合作。この冊子で、ボランティアのキャラクター“ボラビちゃん”が誕生しました。

2022.5.23 雑草と呼ばれてます、春の七草考も



栗野台の公園は、管理者によって定期的に草刈りが行われています。公園に映えるのは望ましくないため、みんな雑草扱い。でも、背が低くてもけなげに、誰も気づかれないうちに花開いています。

大好きなヒナギキョウをはじめ、ニワゼキショウ、セッカニワゼキショウ、ハハコグサ、スポミオオバコ、ドクダミソウ、ヒメコバンソウなどなど、それほど広くない公園の敷地にいろんな種類を見つけることができます。

白い毛が覆う姿を母親が我が子を包み込むことになぞらえたハハコグサ(母子草)は春の七草ですね。これまでも、夏、秋、冬の七草の岐阜バージョンを独断で選定してきましたが、春の七草は比較的納得のいくものが多いですね。でも、七草粥の風習のとおり、食べられる植物が選ばれています。ハハコグサも天ぷらなどに…。ただ、スズナ(蕪)、スズシロ(ダイコン)は、どうなのでしょう。やはり、スミレ、タンポポ、菜の花類は欠かせない気がします。そして、栗野台が造成される前には、自生している春蘭なんかは風格がありますね。



▲幼稚園の頃、幼稚園付近の石垣で見かけたのが、ヒナギキョウとの最初の出会いでした。



▲セッカ(雪花)セキショウも生えていました。写真で見るとヒナギキョウによく似てますね。



▲ニワゼキショウも生えていますが、セッカセキショウの方が多いは意外です。



▲春の七草のハハコグサ。種になり始めたものもあります。

2022.5.26 賑わう水辺



鳥羽川は、昭和 51 年 9 月の大水害の後、改修されました。治水工事は人命を守る重要な施策です。一方、怖いほどたくさんの蛍が飛び交った風景は失われました。今では、川辺に近づくこともできません。

一方、山縣市境の鳥羽川沿いの新川は、コミュニティ水路として整備されています。散策ができ、イグサや菖蒲など、水辺の植物が心和む景観を生み出しています。が、下流の岐阜市に入った途端、草木が多い茂り、橋の上から水の流れを見ることすらできません。隣接した行政区域が生み出す不自然なまちづくりの、見事としか言いようのない不自然な事例が見られます。



◀田植えの終わった田には、まだ小さなオタマジャクシが無数に見られます(カメラを近づけるとちりぢりに逃げていきました)。

話は戻り、コミュニティ水路にはたくさんのアメンボの親子が、波紋を編み出しています。近くの田んぼには、まだ小さいけれど、沢山のオタマジャクシが人影に驚いて右往左往しています。小さなドジョウの影も、泥煙の中に見え隠れしています。

まだ自然が残る粟野ですが、この 1 年間にも宅地開発があつという間に進んでいます。明治用水の老朽化に伴う漏水は、さまざまなインフラの維持管理が困難化することを示しています。今後、コンパクトシティの声が高くなると思われます。しかし、今現在も宅地化が進む郊外部において、人々が快適に暮らすことのできる都市計画、基盤整備は待ったなしのテーマのほずです。が見



▲今年、小学校の近く、公民館の西隣の宅地造成がいつの間にか完了(4.5.7)。



▲バイパスの歩道橋から望む(3.9.25)

2022.5.27 賑わう水辺・その2



昨日の日記で、行政区域で整備が連携されていない見本を紹介しましたが、北方町との境に位置する「夕べが池」は、比較的うまい具合に整備されています。一晩のうちに田んぼが池になったとの伝えから名付けられたこの池は、栗野から車で30分ほどのところにあります。平日にもかかわらず、太公望で岸边は賑わっていました。

ビオトープが日本でも導入され始めた頃、ある大学の構内に整備したところ、予定通り多様な生物が集まってきたのですが、マムシも出没したのに驚いたという話を記憶しています。夕べが池にも、マムシに注意、の看板があります。草は刈ったばかりで問題はなさそうでしたが、周辺の未整備部分の沼地は、近付かない方がよさそうです。

その昔、夜店で売られていたミドリガメの繁殖が大きな問題になっています。在来種に害を及ぼす外来種のアメリカザリガニやアカミミガメ（子どもの頃は緑色をしているミドリガメ）の放流や販売を禁止するための改正外来生物法が11日、参院本会議で可決・成立したばかりです。この池では在来種の甕が何匹も見られます。まだ、流されてきた10cmほどの茶色い子亀（イシガメの子供でゼニガメと呼ばれる個体です）が、手足を必死に動かして、岸边の草むらにたどり着きました。

これだけの広さの池の整備は、栗野には難しいかもしれませんが、鳥羽川の本流に近づけないのであれば、川の水を引き込んでビオトープの親水空間を遊休地に整備することも検討する価値があるかも知れませんね。



▲在来種のカメが何匹も日向ぼっこを楽しんでいます。



▲ヌートリアも住み着いているようで、2匹見かけました。

2022.5.31 賑わう水辺・その3



▲ハサミがないので肉食のスジエビではなくヌマエビの種類とされます。名前を特定しているのですが、見分け方が難しい!

長良川に生息する魚介類の数は、かつては日本有数と言われていました。中流域にも、アカザ、セビン(前びれが色鮮やかで、大型のドンコ・カジカの仲間)、シマドジョウ、サワガニ、時にはウナギ、モクズガニなども見られました。51年の水害以降、河川の整備が進み、いったん雨が降り増水すると何日も濁っていた川は、翌日には濁りが消えていくほど水の流加速度は早まりました。河口堰も運用されている現在、生態系はどう変化したのでしょうか。治水と自然環境の保全は、改めて難しいテーマだと気づかされます。

同じく水害以降に護岸の改修が進んだ鳥羽川は、昔と比べてどうなのでしょう。栗野西7丁目のバイパス高架下の辺りに、怖いほど出現したホタルはいまだ復活していません。では魚介類はどうでしょうか。半世紀以上前には、鮎やシジミがいたとも聞きますが、それはどうに昔話の世界。工事が始まった頃と比べてみるため、百均のお魚キラー(ずん胴の網で、中に練り餌を置きます。百均のなかった当時は、結構高い罟でした)を一晩、沈めてみました。翌朝入り込んでいたのは、ハエ、フナ、アメリカザリガニ、ヌマエビ(トップ写真)。30年前には、ハエやフナのほか、数多くのタナゴに加え、クチボソ(モツゴ)、カマツカなどが混じっていましたが(ヌマエビは入っていませんでした)。水の流れ落ちる所では網でゴソゴソやると大きなナマズが捕れました。仕掛ける場所にもよるので一概に比較できないかもしれませんが、一つ気になるのは、ここ数年、尺ウグイの遡上を見かけないこと。以前、釣り人が、釣りあげてびっくりした拍子に糸が切れた光景が、今も目に焼き付いています。生態系は、やはり変化しているのでしょうか。ヌマエビには外来種も含めていろんな種類があるとのこと。定期的な生態調査が望まれます。



◀ヨシが随分と茂ってきた三面張り護岸の河川敷には、近づけません。この辺りにトラップを仕掛けるとまた違った魚介類が見られるかも。治水面では好ましくない状況かも知れませんが。

◀マガモはとっくに渡っていったはず。カルガモでしょうか。

